

1 【 仙台市立 立町小学校 】

仙台市立 立町小学校
校 歌

一、 仰げば高し天守台
俯せば流れも広瀬川
桜が岡にとり合う
ゆかしき庭に今立てる
校は開きし古の
その立町の名を変えず

二、 桜ほまれの花薫る
わが行く末もしかあれや
仰ぐ昔の跡もよし
清きはかげか我が心
努めて倦まず身をたてて
国と民のためつくせ

土井 晩翠 作詞
田村 虎蔵 作曲

立町小学校は、明治6年7月7日、第7番小学校として開校し、明治9年からは「琢玉小学校」と称しました。明治12年に「立町小学校」と改称しましたが、「玉不琢不成器（玉みがかざれば器をなさず）」の向学心を受け継いできています。土井晩翠先生もこの立町小学校で学びました。

平成15年には、先生の偉業の一端を知ることができる「土井晩翠校歌資料室」ができあがりました。是非お立ち寄りください。

立町小学校の校歌は、大正14年につくっていただき、機会あるごとにいつも心を込めて歌っています。歌詞の最後に「努めて倦まず身をたてて、国と民のためつくせ」という言葉がありますが、晩翠先生が立町小学校の児童に託した強い想いを感じることができます。そんな晩翠先生の想いを汲みながら立町小学校の校歌を歌います。どうぞお聞きください。

2 【 仙台市立 木町通小学校 】

仙台市立 木町通小学校
校 歌

一、 木町通小学校
明治六年はじまって
えらい人たちが育てきた
その後について勉めましょう

二、 青葉の山と広瀬川
高いほまれの藩祖公
三百年のおんかたみ
眺めて日々励みましょう

三、 かがやく光 東から
東西南北 四つの海
世界すべてが睦むよう
みんなで奮発いたしましょう

土井 晩翠 作詞
福井 文彦 作曲

木町通小学校は 校歌の歌詞にもあるように明治6年に「第4番小学校」として開校しました。初代校長矢野成文先生が名付け親となり明治9年「培根小学校」と改名、昭和22年に「仙台市立木町通小学校」となり、現在に至っています。

土井晩翠先生は、入学から立町小学校へ転校するまでの3年間を本校で過ごされました。昭和22年、天皇陛下の行幸を記念して晩翠先生にお願いしてつくっていただいたのが、この校歌だそうです。先生にとって、校歌としては一番最後の作です。「今回は特別に、生まれて初めて童謡調で書いてみました」とのご本人のお言葉が残されています。当時の校歌のイメージとは全く違った、新しいかたちの校歌だったようです。

今年145周年。春は満開の桜、秋には黄金色の銀杏に見守られながら、475名の子供たちが元気いっぱい過ごしています。

3 【 仙台市立 片平丁 小学校 】

仙台市立 片平丁小学校
校 歌

一、塊積り山となり
滴集り川となる
青葉の山に広瀬川
向いのぞめる学びの舎

二、無言の教ゆたかなる
山と水とを見渡して
日々に勉めて一生の
基をこゝに養わん

三、よくはげむ後よく遊び
正しき心すこやかな
身に智を集め技修め
一日も夢と過すまじ

四、小さき幼き今日ながら
二十余年の世々のあと
嗣ぎて第二の国民の
責を務を負わん身ぞ

五、国の内外に名をあげし
傑れし人はいにしえに
今に多きを心して
われ亦跡を追いゆかん

土井 晩翠 作詞
大槻 貞一 作曲

片平丁小学校は明治6年、五番小学校として開校しました。卒業生には、文化勲章を受章された志賀潔氏や野副鉄男氏、西澤潤一氏をはじめ多くの著名人がおります。

本校は、西に広瀬川と青葉山をのぞみ、学区内に瑞鳳殿もあり、自然や歴史的な環境に恵まれた地域にあります。現在527名の児童が、「身に智を集め技修め 一日も夢と過ごしまじ」の歌詞のように、いきいきと学校生活を送っています。

また、春は「片平地区みんなの大運動会」、夏は「かたひら夏祭り」秋は「かたひら waiwai 広場」、冬は「餅つき大会」と、季節ごとに地域の皆さんと楽しむ行事があります。

大正3年に制定された校歌は、毎年行われる同窓会や姉妹校として交流している北海道白老町の白老小学校でも歌われるなど、大切に歌い継がれています。今日は、ブラスバンドの有志が、校歌を披露します。どうぞお聞きください。

4 【 仙台市立 第二中学校 】

北五番丁高等小学校
校 歌

一、青葉廣瀬の山と水
そびゆるはしる郷の北
北の高等小學の
教の庭に通ふ子よ

二、小さき種のそだつ時
空つく高き木は繁る
くだるしづくのやまぬ時
堅き巖も穿たれん

三、右と左のいさゝかの
隔末はいや遠し
登らば雲の上までも
降らば土の底までも

四、再び寄せぬわかき日を
さらば空しく去らしめす
心を磨き身を鍛へ
後の榮の基おかん

土井 晩翠 作詞
幾屋 純 作曲

仙台市立第二中学校は、昭和25年に開校、昨年度は70周年の記念式典を行いました。

学都仙台の中心部に位置しており、学区内には、美術館をはじめ、多くの文化公共施設があります。春の「青葉まつり」、冬の「光のページェント」など、仙台の代表的なイベントにも参加する機会があり、身近に感じています。

また、西に自然豊かな青葉山、その山里を流れる清流豊かな広瀬川など、自然にも恵まれております。

北五番丁高等小学校は、大正4年4月、現在の第二中学校の場所に開校いたしました。校歌はもちろん土井晩翠先生の作詞によるものです。今日は、吹奏楽部1・2年生と生徒会執行部の合同チームによる校歌披露とさせていただきます。どうぞ、お聴きください。

5 【 尚綱学院中学校・高等学校 】

二
 金華松島塩釜の
 ゆかりの郷の春と秋
 色も匂も大能の
 御手の描ける跡とみて

一
 橄欖山の夕暮れの
 歌今遠し二千年
 山は裂くるも播ぎなき
 愛と望と信の道
 聖き教の御光を

三
 ここにやしまの東北
 大和撫子姫百合の
 花に蕾に浴びしめよ

三
 青葉広瀬をまのあたり
 錦穿ちて綱尚う
 深き警心して
 教の庭にいそしめる
 嗚呼わが姉妹知を集め
 操を磨け天地の
 神の御栄光現して
 道と邦とにつくす迄

尚綱学院中学校・高等学校 校歌

土井 晩翠 作詞
 佐々木 英 作曲

私達が卒業した尚綱女学院（現尚綱学院）中高部は、26年前の1892年に創立されました。現在は幼稚園、中学校、高等学校、大学そして大学院をもつ学院となっております。キリスト教主義の女学校として創立25年を迎えた1917年（大正6年）に、土井晩翠先生作詞・佐々木英先生作曲による「校歌」が作られました。

2003年に大学が新設され尚綱学院と改称、2010年に新しい「学院歌」が制定されました。中学校・高校も2008年に共学となり「校歌」は歌われなくなりましたが、中学・高校の合唱団が歌い継いでいます。

尚綱学院同窓会「ぶどうの会」は、同窓会会員の中から「賛美歌を歌う会が欲しい」という願いが寄せられ、2004年11月に発足しました。賛美歌・校歌・学院歌・楽しい歌等を歌い練習（年間10回）をして、毎年「シオンの園」「ありのまま舎」で訪問コンサートを行い、同窓会の行事でも歌っています。

尚綱の精神が盛り込まれている校歌は、全員大好きで、生き方の指針となっております。今回は中高生が出演できず淋しいですが、私達「ぶどうの会」がお届けいたします。

6 【 福島県立安達高等学校 】

福島県立安達高等学校 同窓会 仙台支部（仙台まゆみ会）

福島県立安達高等学校
校歌

一、安達のまゆみ 古しえの
 歌によまれし 跡遠し
 安達の名負う 高校の
 健児きたえよ 心と身
 健児かためよ 身と心

二、新たなわが世 あげぼのの
 朱のおいを 見るごとく
 「望」はわれを 励まして
 高き遠きに 進ましむ
 高き遠きを 仰がしむ

三、安達のまゆみ 染めなすは
 赤き心の 象徴か
 安達の名負う 高校の
 健児つくせよ 国のため
 健児つとめよ 世々のため

土井 晩翠 作詞
 梁田 貞 作曲

福島県立安達高等学校は大正12年（1923年）、福島県立安達中学校として福島県安達郡二本松町（現二本松市）に創立され、5年後には創立百周年を迎える伝統ある高校であります。校名・校章は万葉集に「陸奥の安達太良の真弓」と詠われたことに由来し、校名には「安達」、校章には「真弓の花」を象ったものです。また、同窓会の通称も「まゆみ会」になっております。真弓は強靱でしなやかで古代弓の材料として用いられ、その花は清楚でその実は誠実さを表すとしてその精神は「教育目標」に掲げられています。そしてその実施項目として「国際人の育成」「勉強と部活の両立」「環境と開発を考える」を推進し、結果平成24年12月本県初となるユネスコスクールの承認を受け国内外を問わず積極的に活動を続けております。

同窓生は文化勲章受章の故高橋信博士をはじめ、国内外、各分野で広く活躍しております。

校歌は、各校の生い立ちを起点に未来へ広がる希望を歌うもの。

土井晩翠先生が想を込めて作詞された校歌を精一杯歌います。

7 【 福島県立福島高等学校 】

福島県立福島高等学校 同窓会（みやぎ梅苑会）

福島県立福島高等学校
校 歌

一、徽章は薫のいみじき梅花
氷霜凌げる線は清し
健児は一千こそりて励む
福島高校榮えよ永く

二、庭には湛ふる心字の池水
穿らし由来は尊し優し
六千余尺の姿をそこに
映すや吾妻の山また嬉し

三、大地に根を擡え虚空に入りて
高山示せり理想の跡を
我亦日に日にわが歩を進め
あせらず弛まず遠きに行かん

四、自然の眺め妙なる窓に
朝夕無言の教へにひたり
智徳を磨きて寸時を惜み
紅顔あしたの誇りを思ふ

五、あゝ我青春望みにあふれ
教の庭より養うけて
花咲きみのりて世の為立たむ
福島高校榮えよ永く

土井 晩翠 作詞
中田 章 作曲

本校は、1898年（明治31年）に福島県第三尋常中学校として福島県福島市に開校し、その後、福島県第三中学校、福島県立福島中学校と改称され、昭和23年の学制改革に伴い「福島県立福島高等学校」と改称開設され現在に至っております。

この校歌は、母校創立25周年記念事業の一環として作成され、母校の二宮敬三先生が土井晩翠先生に委嘱しました。土井先生は自ら作詞し、作曲を中田章先生に依頼し、1923年に完成しました。作曲の中田先生は、「めだかの学校」「小さい秋みつけた」「夏の思い出」などを作曲した中田喜直先生の父親で、「早春賦」を作曲したことで知られています。

その校歌の詩には、母校の佇まいや、徽章の梅に込められた「清らかであれ」「勉励せよ」「世のためたれ」の精神が見事に詠まれており、学校はその後、旧制中学校から新制高校に変わり、生徒数も増え、2003年からは男女共学となりましたが、歌詞はそのまま歌い継がれています。

私達は、宮城県在住の同窓生の集まりで、母校の徽章が梅の花であることから「みやぎ梅苑会」と称し、1996年再建設立以来、年1回の総会・懇親会をはじめ、母校の支援などさまざまな活動を行っています。

今日は、母校を誇りとし歌詞の意味を噛みしめながら、一同心を込めて歌わせて頂きます。

8 【 岩手中学校・岩手高等学校 】

岩手中学校・岩手高等学校 同窓会（石桜同窓会）

岩手中学校・高等学校
校 歌

一、旭日におう桜花
其非大地の深きより
出でて貫く花崗石
郷の名所青春の
意気をかたどるうれしさよ

二、見よ金剛の不壊の念
神と祖国と人道の
三つに仕えて怠らず
日々につとめて光榮を
期する一団若き友

三、大沢川原もとをおく
わが中学の同じ窓
希望の光身に浴びて
心ひとしくすこやかに
高き遠きにあこがるる

四、無言のさとし朝夕に
七千尺の岩手山
北上川の八十里
友よ心の目にも見て
いざ向上の道踏まん

土井 晩翠 作詞
山田 耕作 作曲

本校の前身である旧制岩手中学校は大正15年4月に創立され、戦後の学制改革により新制岩手中学校・岩手高等学校としてスタートしました。岩手県唯一の男子中高一貫校にして、盛岡市にある国の天然記念物「石割桜」を象徴とする「不撓不屈」「質実剛健」のいわく「石桜精神」の気風を涵養し、社会的有意な人材育成を目指す私学校であります。ご紹介する校歌は開校2年後の昭和3年1月に土井晩翠先生の作詞、山田耕作先生の作曲により誕生しました。これは所謂晩翠調とも言える七五調・五言詩で、曲調は軽快なテンポで雄麗さがあります。その一番は「石割桜」の力強さが、二番には校訓の「積慶・重暉・養正」を組み入れ、三番は学園での友情を、そして四番では郷里の山河が称えられ、詠み込まれております。

我々はこの校歌に限りない愛と誇りを持っており、本日ここに石桜同窓有志一同心を込めて歌わせて頂きます。岩手中学校・岩手高等学校校歌です。

9 【 秋田県立秋田高等学校 】

秋田県立秋田高等学校同窓会仙台支部

秋田県立秋田高等学校校歌

五、	四、	三、	二、	一、		
故山の伝統光をはなち	おのれを修めて世のためつくす	あゝ友 桜の旭日にほふ	園の名「千秋」君また遠く	敬天愛人理想を高く	精神奮ひて学びてやまず	金鉄つらぬく陽気の如く
		先蹤追ひつつ未来の望	ゆたかに健児は其途進む	生れし秋田の土こそ薫れ	篤胤 信淵 ふたつの巨霊	秋田の高校一千健児
		わが生わが世の天職いかに	紅顔日に日に顧み思ふ	海にと馳せ行く雄物川波	高きと長きと無言の教	長江流れて六十幾里
		姿はけだけし三千余尺	天上はるかに太平山の			

土井晚翠 作詞
梁田 貞 作曲

秋田県立秋田高等学校は、1873年・明治6年に現在の秋田市に創立され、今年で145年目となります。今年4月現在の在籍生徒数は男子455人、女子377人、合計822人です。

今年の第100回全国高校野球選手権で秋田県の金足農業が準優勝しましたが、秋田県勢としては第1回大会以来の103年ぶりの決勝進出と言われました。その1915年・大正4年の第1回大会で惜しくも京都二中に敗れたものの決勝に進出したのが、わが母校の前身である秋田中学でした。さて、秋田高校校歌は、1922年（大正11年）に制定され。作詞は当時の同窓会長が二高（現東北大学）時代の恩師の土井晚翠先生に依頼し、作曲は「城ヶ島の雨」などを作曲された梁田貞（やなだただし）先生です。

歌詞にある「わが生わが世の天職いかに」、「おのれを修めて世のためつくす」は、社会貢献を歌ったもので卒業生に人気が高く、在校生たちもあらゆる場面で学校生活の目標としております。秋田高校同窓会は、1915年（大正4年）に創立され、現会員29,000人余、同仙台支部は1973年（昭和48年）に発足し、毎年1回支部総会を開いて仙台市と近くに居住する同窓生の親睦を深めています。

10 【 北海校校友会 】

五、	四、	三、	二、	一、		
我ぞ無窮の道を追う	嬉し青春生ありて	文華の景に照らさるる	面影兼ねて新たなる	威儀三千のいにしへの	母校の名をば揚げんかな	稜々の意気さかんにて
						冬を凌ぎてにおうごと
						操さながら寒梅の
						嵐の叫び雪に笑む
						健児手をとりに睦みあう
						窓のあけ暮れ幾百の
						寸時を惜しむ蛍雪の
						都の花はよその春
						健児集まる学びの舎
						基つくところ一段の
						川に臨みて文教の
						その端ここに豊平の
						野は石狩の奥千里
						空光明のおとずれよ
						闇より明けし北海の
						緑の大野見るごとく
						その寂寞の冬去りて
						天地を包む雪の色

土井晚翠 作詞
本居長世 作曲

北海高等学校校歌

清秋の候、皆様におかれましては益々ご清祥のこととお慶び申し上げます。本日、第9回「土井晚翠先生が作詞した校歌と一緒に歌いましょうの会」が盛会に開催されました事、心よりお祝い申し上げます。また、実行委員会の皆様、仙台市立立町小学校関係者の皆様に感謝と御礼を申し上げます。

北海道は札幌より北海高等学校を母校とする「北海校校友会」が参加させて頂く事となりました。北海高等学校は、1885年（明治18年）に創立し、今年で133年を迎えました。創始者、大津和多里が青年たちに語りかけた事が北海の源流です。大津氏は仙台藩士であり、後に札幌農学校（現 北海道大学）に入学。そして、将来有望な青年たちの為に教育の場へ突き進む事となります。

北の大地に伝統を刻み続ける第一歩、北海英語学校（後の北海中学、現 北海高等学校）の始まりでした。その後、戸津高知氏（明治5年仙台生まれ）が北海中学第2代校長に就任し、「文武両道・質実剛健・百折不撓・自由と正義」という北海の校風を育てられました。この戸津氏が同郷の土井晚翠先生に校歌を依頼し、晚翠先生により作詞され、間もなく本居長世氏によって作曲されたという事です。このように仙台とのご縁の中で完成された我が校の校歌は、北海精神そのものであり、卒業して年月が流れようとも消える事のない心の支えとなっております。

本日は、北海の先人達と土井晚翠先生を偲び、感謝の意を表するとともに、日本三大校歌と称されております母校北海高等学校校歌を卒業生4万人と在校生の想いを込めて歌いあげたいと思います。我が校シンボルである応援団OB会を引き連れて参りましたので、エールのもと声高らかに披露させて頂きます。

末筆ながら、仙台と北海との深い絆を想い、貴会の益々のご発展と、皆様方のご健勝を祈念致しましてご挨拶とさせて頂きます。

1 1 【 群馬県立太田高等学校 】

群馬県立太田高等学校
校歌(乙) 式場歌

土井 晩翠 作詞
楠美 恩三郎 作曲

一、赤城浅間を軸として
八州の野の開く端
貫き走る大利根の
岸は母校のたつとろ
やまざる流高き山
無言の教あゝ彼に

二、操はしるぎ中黒の
旗の風に飛びし場
坂東武者の代々つぎて
雄たけび高くゆりし郷
大田高校高き名を
伝えむ責はあゝ我に

太田高等学校校歌は、明治37年ごろに制定されたといわれています。初代校長の三浦菊太郎先生が、第二高等学校の同窓生である土井晩翠先生に校歌の作成を依頼し、当時の太田中学校の所在地ならびに周辺の地図や太田に関する資料を送りました。土井晩翠先生は、一度も太田に来ることなしに、地名や歴史を織り込んだ甲（行軍歌）と乙（式場歌）の校歌二曲を作りました。こうしてできあがった校歌は、100年以上にわたり太田中学校・太田高等学校の生徒に歌い継がれていきました。太田高等学校校歌は、群馬県内の高等学校校歌としては最古のものです。

ちなみに昭和17年5月6日、偶然にも土井晩翠先生が太田中学校を訪れて講演を行いました。その際生徒が誇らしく高らかに式場歌を歌い、土井晩翠先生は校歌をじっと聞きほれていたそうです。

本日は、土井晩翠先生に聞いていただいた太田高等学校校歌乙(式場歌)を披露いたします。

1 2 【 仙台市立秋保小学校 】

秋保小学校
校歌

土井 晩翠 作詞
作曲 福井 文彦

一 大東岳四千尺 ふもとをよこの名取川
途に不動の大滝を 含みて海にそそぎいる
宮城の村の秋保村 和が学園のあるところ

二 金剛たえてつるがさる 国の姿とそり立つ
磐神岩を仰ぐとき 千歳古き名湯の
玉なす中に ひたるるとき 感謝は郷にまた国に

三 この名邑に生まれいで この学園に教えうけ
強く正しく明朗に 日々につとめて 身と心
ねりてきたえて一斉に 国と郷とに つくすべし

秋保小学校は、明治6年に前身となる学校が開校した歴史ある学校です。秋保という地名も古くから知られており、紀貫之の古今和歌集にも「秋保の里」が記されています。校木はヤマモミジで、春には薄紅に芽吹き、夏は緑、秋は鮮やかな紅葉となります。校章は昭和23年に制定され、「山紫水明の地、偉人傑士を生む」と伝えられているとおり、秋保からは政治家・教育者、その他多数の方々を輩出していることをイメージしたそうです。郷土を愛する情熱を、赤の正三角形の大東岳。潔白な心を白の山桜に例え、コバルト色の葉で健康を表し、躍進する秋保の姿を現しています。

さて、校歌についてですが、秋保の名勝ともいうべき大東岳と秋保大滝を1番に、磐司岩と秋保温泉を2番に配し、秋保小のみならず馬場小・湯元小でも歌えるようにしています。つまり、秋保地区三校共通の校歌であり、秋保地区の誰もが卒業後も親しく口ずさむことができるようになっています。さらに3番には校訓である「強く・正しく・明朗に」の一説が入り、秋保っ子の気概と誇りの高さを垣間見ることができます。

1 3 【 愛知県新城農蚕学校 】

一、歴史に名高き戦場近く
産業豊かに地の利を占むる
新城今見る斯道の校舎
豊川しづかに其のもと流る

二、大地に起りて雲井を凌ぐ
鳳来寺の山偉なる仰ぎ
学芸はたまた近きに起り
み
高きにいたるを顧み思ふ

三、小さき生物小さき種粒
やどすや何等の微妙の力

愛知県新城農蚕学校

校歌

土井 晩翠 作詞
中田 章 作曲
鈴木真喜生 編曲

四、自然の恵を此の身に占め
造化の巧を補ひ足さん
天職おのおの高きを感じ
科業に日に日に研磨の勇

五、人文道わが世を照らす
光明逐ひつつ勉めてやまず
青春盛りの歓喜に満ちて

愛知県から「新城農蚕学校」の校歌を紹介させていただきます。4回目の参加となります。どうぞよろしく願いいたします。

さて、「新城農蚕学校」の「蚕」は、絹糸を紡ぎ出す「かいこ」という虫を意味します。私たちの新城は、古く1千年以上前から、伊勢神宮に絹糸を献上してきた土地で、土井先生がこの校歌を作られた大正時代頃までは、「かいこ」から糸を作り出す養蚕が盛んでした。ところが、明治に入り、糸の献上は廃止され、今や「かいこ」を育てる家はかろうじて1件を残すのみ。養蚕学校自体も60年以上前に廃校となり、校歌として歌われることは、もうありません。同窓会も10年ほど前に解散していると聞きました。

そんな中、ふるさとの文化資源の掘り起こしの中、かつて新城市内に存在していた素晴らしい校歌を、より多くの人々に再認識していただくきっかけとなるよう、この会に参加させていただいています。

作曲は、「春は名のみ風の寒さや…」モーツァルトを思わせる芸術歌曲として名高い「早春賦」で名を残す中田章氏。作詞の土井先生とのコラボレーションは、大正時代の日本の望みうるハイレベルな組み合わせと言えるでしょう。新城市内では他にも「あめふり」や「シャボン玉」といった童謡を作曲した中山晋平、「同期の桜」を作曲した大村能章といった日本を代表する大作曲家の手になる校歌もかつては歌われていました。この「新城養蚕学校」校歌も含めて、芸術的価値の高い校歌は、学校が失われようとも、地域の歌・市の歌として親しまれ、受け継がれていくことを望んでいます。

さて、本日お聞きいただく校歌の冒頭は、次のように始まります。

「歴史に名高き戦場近く、産業豊かに地の利を占むる」

私たちの街の誇りでもある、織田信長が天下無敵の武田の騎馬隊を3千の火縄銃を駆使して破ったと伝えられる長篠・設楽原の古戦場には歴史ファンが集い、また、今まさに新東名高速道路のインターチェンジも完成し、土井先生の残した詩を、再びかみしめるべき時が到来したような気がしています。それでは、ベートーヴェンのヴァイオリン協奏曲の第1楽章の戦慄を思わせる凛とした佇まいを持った「新城農蚕学校」校歌、是非ご鑑賞いただければ幸いです。

1 4 【 長野県岡谷工業高等学校 】

(一般社団法人) 長野県岡谷工業高等学校同窓会

1. 岡谷工業高等学校校歌



岡谷工業高等学校校歌

作詞 土井 晩翠
作曲 陸軍軍楽隊

一、富士の高嶺と八ヶ岳
共に雲居に仰ぎみる
名勝諏訪の郷にして
園を富まさん産業の
道を教ふる学びの舎

二、世界に亘る工業の
その雄姿をこそぞし
寸隙惜み励みつつ
君恩師恩親の風
旣に銘じて忘らず

三、風よ人生の若き春
希望の光宿照らし
紅血高く脈に鳴る
業成る朝日に辱し
母校の誓いぞ掲げん

岡谷工業高校は、長野県岡谷市にある工業高校です。製糸業が隆盛を極めていた明治の末期、平野村（現在の岡谷市）では次代を担う人材を育成する学校設立の機運が高まり、明治45年4月に生徒数120人、水田1,000坪、桑畑1,500坪の広大な規模で、平野村立平野農蚕学校が設立されました。

その後、平野蚕糸学校→諏訪蚕糸学校→岡谷工業学校と改称し、昭和22年、現在の長野県岡谷工業高等学校となりました。

校歌は、昭和13年長野県岡谷工業学校に生まれ変わったとき、校長の小川を通じ、土井晩翠先生に作詞を依頼。作詞にあたっては、

＊蚕糸学校から工業高校への転換

＊校舎から一望できる富士山・八ヶ岳・諏訪盆地の様子

を盛り込むよう依頼されました。

校訓は『至誠一貫』、『質実剛健』、『技術者たる前に人間たれ』で、この精神は脈々と現在も継承され、22,000余の卒業生は地元産業界を始め広範な分野で社会の発展・向上に貢献しています。

15 【 滋賀県立八幡商業高等学校 】

滋賀県立八幡商業高等学校近江尚商会（同窓会）

八幡商業高等学校校歌

土井晚翠 作詞
東京音楽学校 作曲

- 一、漣清き鳩の海 その八景の岸近く
敷ける教の庭の中 望みあふるる青春の
健児日毎のいそしみは 邦と民との富の道
- 二、鵬の翼の延びざりし 鎖国の世にも大八洲
その隅かけて市とせし 父祖にならむ東海の
潮一度舟乗せて 四海にいたる今の時
- 三、印度の珠玉アラビアの 香も集めん南洋の
珊瑚琥珀も欧の西 送らん道や幾万里
潮と共に舟を駆る 貿易風の名もよしや
- 四、大塊ひとつ日月の 光り遍く照るきみは
自然と人と相待ちて 万の宝生むところ
皆わが領と心して 探れ扶桑の国の富
- 五、扶桑の国の富斯くと 宣らん健児の志
養ふ処漣の 近江の海の岸近き
教の庭に光菜の 景とこしへに照らしめよ

滋賀県立八幡商業高等学校は、近江商人発祥の地のひとつである近江八幡市にある。明治19年（1886年）に滋賀県商業学校として創立され、創立132周年を迎える伝統校である。かつて大宅壮一氏が「近江商人の士官学校」と称し、卒業生は国内経済界は勿論、各界や海外で活躍し、多くの著名人を輩出、これまでに約23,000人の卒業生を輩出している。

現在、学年6クラス（商業科4、国際経済科1、情報処理科1）を配する中規模校である。現在においても、本校創立の精神や意義等が継承され、先進的な取組を実施している。なかでも特徴的な取組が、「近江商人再生プロジェクト」である。現代、次代の「近江商人」を輩出していくために、このプロジェクトを立ち上げた。近江商人の精神や商法（手法）等を実践的に体得し、経済・商業人として、将来必要となる企画力、開発力、計画力、実践力等を身に付け、将来、全国ひいては世界で活躍する人材となってほしいというのが目的である。その他にも、現在、商業教育の活性化に向けたさまざまな取組を実施している。

最後に、商業のあるべき道や近江商人の精神などが歌詞のなかに込められている校歌は、明治40年11月1日に制定され、幾多の歴史の変遷があったなかでも、変更されず、現在も在校生と同窓生が一同に唱歌できる自慢の校歌である。

16 【 大阪府立北野高等学校 】

大阪府立北野高等学校内 六稜同窓会

北野高等学校校歌

土井晚翠 作詞
岡野貞一 作曲

「六稜の星のしるしを」

- 一、六稜の星のしるしを 青春の額にかざし
紅顔の子弟千有余 日に通う北野高校
- 二、そのむかし難波御堂に 堂島に次ぎて北野に
育英の門を開きて 百有余年花は薫りぬ
- 三、淀川の深き流れよ 六甲の雲いる嶺よ
名にし負う大阪の城 天才の高きかたみよ
- 四、天然とはた人間と とこしえにわれの亀艦
眺むるも胸のときめき 嗚呼友よ奮わざらめや
- 五、大東の邦の運命 青春の肩にかかれり
あゝ母校北野高校 その健児はげまさらめや

北野高等学校は大阪市の北部淀川区新北野2丁目にある府立高等学校であり、その創立は1873年（明治6年）に遡り、大阪府で最初に設立された欧学校を起源とします。今年で創立145年を迎える歴史と伝統の中で、アカデミックな教育と文武両道を重視した教育を育み、幾多の有為な人材を世に輩出してきております。平成26年度には文部科学省から「スーパーグローバルハイスクール（SGH）」に指定され、これまでの伝統と近年の先進的な取り組みに培われる「北野の教育」をさらに充実させて取り組んでおります。この北野高等学校の同窓会をその校章に因んで「六稜同窓会」と称して活動を行っております。

本校の校歌は、大正天皇即位大典記念の一つとして大正4年11月に制定されました。当時の梶山校長が作詞を第二高等学校（現東北大学）教授土井晚翠氏に依頼し、同氏の歌詞を基に作曲を東京音楽学校（現東京芸術大学）に依頼し、同校の岡野貞一教授が担当して完成したものです。なお、この晚翠氏の歌詞は同氏の詩集「曙光」に収められています。